

2019 年度「国際哲学特講」アルザス研修（報告）

目次

§ 1 概要	p 1
§ 2 研修の詳しいスケジュール	p 3
§ 3 参加学生の言葉から	p 5
§ 4 写真でたどるアルザス研修	p 12
§ 5 地元マスメディアでの扱い	p 33

§ 1 概要

■はじめに

法政大学哲学科の「国際哲学特講」(秋学期 2 単位)では、フランスのアルザス欧州日本学研究所(CEEJA)の協力を得て、学期の最後、2 月初め(2020 年 2 月 2 日～2 月 9 日)に、ドイツのハイデルベルグ大学とフランスのストラスブール大学で、合同ゼミを実施しました。

この合同ゼミは 3 つの大学それぞれで正規の行事です。そして、このゼミが締めくくる半期の授業全体が、法政大学とそれぞれの大学とで共同運営されています。すなわち、2019 年 8 月に、翌年 2 月の合同ゼミでのテーマを共に選定し、9 月から翌年 1 月まで、それぞれの大学では合同ゼミに向けての授業を展開しました。その間、10 月から 1 月まで、ストラスブール大学と法政大学との間では、国際回線(zoom)を通しての学生間の対話も行われました。

このような準備を経て、研修期間中に、まずはハイデルベルク大学(2 月 3 日)で、ついでストラスブール大学(2 月 5 日)と CEEJA(2 月 6 日)で、それぞれ合同ゼミを行いました。

■在ストラスブール日本国総領事の合同ゼミでのご挨拶

なお、今回の研修では、2 月 5 日、ストラスブール大学での合同ゼミの会場に、現地で日本政府を代表する在ストラスブール総領事の赤松武氏が足を運び、学生たちに交流の意義に触れる挨拶をして下さいました。大学間の単なる教育交流を超える国際交流としての意味合いが、お話によって、研修に与えられたと思います。

■合同ゼミの内容

ハイデルベルク大学

2 月 3 日にハイデルベルク大学で、ハンス・クレーマ先生ならびにクレーマ・ゼミの皆さんと、〈現代日本におけるフェミニズムおよびジェンダーの問題〉をテーマに合同ゼミを行いました。

クレーマ・ゼミでは秋学期、日本におけるフェミニズムの問題を、女工哀史の明治から始めて、ウーマン・リブの現代に至るまで、歴史をたどって検討してきました。その最後、今回の合同ゼミでは、代表の 3 名の学生が「伊藤詩織裁判と報道」をテーマに、同裁判の日本(語)での報道と諸外国(語)での報道との比較検討を行い、報道が制限されているかのような日本においては、女性の権利問題はまた過去のものとなっていないと指摘しました。(日本語での発表)

それに先立って行われた法政側発表では、やはり 3 名の学生が、“LGBTQ + in Japan—Society and Culture”のテーマで、社会的には男女差別がまだ残る一方で、文化的には、LGBTQ+への理解などが進みつつあること、しかしそのような文化の力にも限界があって、SOGI(性的指向・性自認)が含意する人間個々の尊重といった目標からはまだ遠い状態にあること、が指摘されました。(英語での発表)

それぞれ優れた発表で、そこから出発しての、グループ討論、全体討論では、活発な意見交換が行われました。ハイデルベルグの学生たちは、LGBTQ+と言った話題が、コンプレックスなくテレビドラマでも扱われているという日本の現状に、他方、法政の学生たちは、Me Too といった性被害糾弾の声が、恐れを乗り越えて社会で発せられているドイツの現状に、強く感じるどころがあった様子です。（日本語での討論）

ストラスブール大学

2月5日・6日にはストラスブール大学と CEEJA で、一日半にわたって、黒田昭信先生ならびに黒田ゼミの皆さんと、谷崎潤一郎『陰翳礼賛』を共通テキストとしての合同ゼミを実施しました。昼食をはさんで丸一日となった初日には、黒田先生の「陰翳の現象学」と題された基調講演に加えて、ストラスブール大学から6つの個人発表、法政から3人1組で4つのグループ発表が行われました。翌日午前中 CEEJA での2日目のゼミでは、前日の発表を受けて、テーマをいくつか絞って、グループ討論と全体討論が実施されました。

半期の準備を経てのものですが、「谷崎の言う〈陰翳〉は、主観/客観といった二元的対立に先立ってある、世界の〈存在のテクスチャー〉（メルロ＝ポンティ）を開示する力を持つ」とする、黒田先生の当初からの読解に従って、各発表は、〈陰翳〉のこの現象学的力をそれぞれに探るものとなりました。

ストラスブール大側の発表では、谷崎の〈陰翳〉を、〈滑稽〉や〈無味〉（フランソワ・ジュリアン）、さらには〈いき〉（九鬼周造）や〈悪〉（ボードレール）といった他の美学的概念とつなげる検討、また、映画（アラン・コルノー）や建築といった文学以外の美学的営為とつなげる検討、が行われました。これらの検討によって、〈陰翳〉が持つ文化的喚起力が確かめられていきました。（すべて日本語での発表）

他方、法政側の発表では、黒田先生からの課題でしたが、谷崎の『陰翳礼賛』とメルロ＝ポンティ『眼と精神』との比較検討から、まず〈陰翳〉（谷崎）と〈あいまいさ〉（メルロ＝ポンティ）との重なりが示されていきました。そして、〈陰翳〉のこの〈あいまいさ〉の内実が、〈陰翳〉に〈暖湿〉（和辻哲郎）や〈間〉（加藤周一）や〈不完全さ〉（岡倉天心）を見ることによって、また、〈陰翳〉に〈西洋趣味〉と〈東洋趣味〉の混入や、〈日本主義〉と〈反日本主義〉のねじれを見ることによって、確かめられていきました。（すべて日本語での発表）。

その後の討論を通じて感じられたのは、谷崎の〈陰翳〉が、ストラスブールの学生たちにとってはすでにどこでも通用可能な、文化的な共通価値（〈インエイ〉）となっているのに対して、法政の学生たちにとっては、それはやはり〈陰翳〉として日本的なものであり続けているという、ことです。このズレを双方の側から、学生たちも強く感じたようです。（討論もすべて日本語）

■若手研究者による国際哲学セミナー

2月7日には、前年までの「若手研究者に聞く会」の拡大版とも言うべき、「若手研究者による哲学セミナー」〈言語と社会・言語と哲学〉が CEEJA で開催されました。ストラスブール大学講師細川尚子先生（「現代日本における言語とアイデンティティ：国外で日本を研究することの意義」と法政大学講師君嶋泰明先生（「日本で西洋哲学を研究することの難しさ：日本でハイデガー哲学を研究してきた経験から」）からの講演がまずあり、その後、現在ドイツ、カールスルーエ大学に交換留学中で、研修にオブザーバー参加の哲学科4年石塚奎吾君が「私の留学生活」と題したスピーチを行いました。細川先生からは、日本を知るためには、日本を離れて、外から日本を見る必要があること、そして君嶋先生からは西洋を知るためにも、やはり日本を離れる必要があるであろうことが、それぞれ、ご自身の研究経験から、

説得的に語られました。

■見学、観光とガストロノミー

以上のかかなり密な研修の合間を縫って、ハイデルベルク旧市街（ハイデルベルク城、ネッカー川、学生牢、哲学者の道など）、セレスタ旧跡（ユマニスト図書館、サン・ジョルジュ教会など）、オーケニスブール城、エギスハイムやリクヴィルといったアルザスの小村、ストラスブール旧市街（大聖堂など）、コルマール旧市街（ウンターリンデン美術館など）を見学しました。また、食文化で知られるアルザス地方の代表的な郷土料理（シュークルト、タルトフランベなど）や名産のワイン（リスリング、ゲビュルツトラミネールなど）も賞味しました。

■授業以外での学生間の交流

2月3日のゼミの後、ハイデルベルグでは、ハイデルベルク大学生たちと学食で昼食をともにしました。またストラスブールでは、一日ゼミの日であった2月5日、ストラスブール大学生たちと昼食や夕食をともにしたのはもちろん、その夜はともに、CEEJA に宿泊し、懇親会も含む楽しい交流の時間を持ちました。またその翌日2月6日のストラスブール旧市街のグループでの見学には、ストラスブール大学生たちが同道してくれ、ゼミを通じてとはまた別の打ち解けた交流も活発に行われました。

§2 研修の詳しいスケジュール

法政大学「国際哲学特講」

2019年度アルザス研修プログラム

2020年2月2日（日）～9日（日）6泊8日（一泊機中）

法政大学参加者：

- ・哲学科学生 14名にドイツ・カールスルーエ大学に留学中の哲学科4年生1名
- ・引率 安孫子信、君嶋泰明（オブザーバー）

■1日目

2月2日（日）

05:20 羽田空港より直行便でドイツ・フランクフルト空港到着。

チャーターバスにてドイツ・ハイデルベルグへ移動

07:00 ホテルにアーリーチェックイン・朝食・休息

12:00 ハイデルベルク旧市街見学（ハイデルベルク城、薬物博物館、古橋など）

19:00 夜ハイデルベルグで自由夕食

21:00 ホテル帰着

ホテル泊

■2日目

2月3日（月）

ホテルにて朝食後、ハイデルベルグ大学に向けて出発（徒歩）

9:30 ハイデルベルグ大学にて合同ゼミ：〈近代日本におけるフェミニズムとジェンダーの問題〉

ハイデルベルグ大学日本学科ハンス＝マルチン・クレーマ先生

ハイデルベルグ大学日本学科生＋法政大学哲学科生

ハイデルベルグ大発表：「伊藤詩織裁判の報道比較」

法政大発表：「日本のLGBTQs—社会・教育と文化」

12:30 大学学食にて昼食

13:30 旧市街見学（学生牢・哲学者の道など）
17:00 チャーターバスにてアルザスへ向け出発
19:00 中途のレストランにて夕食
22:00CEEJA 着
CEEJA 泊

■3 日目

2月4日（火）エクスカージョンの日
7:00CEEJA にて朝食
9:00 オーケニスブール城へ向け出発
9:30 オーケニスブール城見学
10:45 オーケニスブール城から出発、
セレスタ着後、サン・ジョルジュ教会、サント・フォワ教会など見学
12:00 セレスタのレストランにて昼食
13:30 セレスタ市、ユマニスト図書館見学
16:00 エギスハイム見学
17:00 カイザスベルク村へ向け出発、着後見学
18:45 カイザスベルク村近くのレストランにて夕食
21:00 CEEJA 着
CEEJA 泊

■4 日目

2月5日（水）
7:00 CEEJA にて朝食
8:20 ストラスブールに向けて出発
10:00 ストラスブール大学 PATIO 新館階段教室にて合同ゼミ：〈谷崎潤一郎『陰翳礼賛』をめぐって〉
（第1部）
ストラスブール大学日本学科黒田昭信先生
ストラスブール大学日本学科生＋法政大学哲学科生
法政大発表：「存在の織地－黒田先生への応答」
黒田先生特別講義：「陰翳の現象学」
12:30 大学内のレストランにて昼食
14:00 ストラスブール大学 PATIO 新館階段教室にて合同ゼミ：〈谷崎潤一郎『陰翳礼賛』をめぐって〉
（第2部）
法政大学発表：「日本文化を経めぐる『陰翳礼賛』／「日本人の美意識の根本にある〈陰翳〉」／「谷崎はなぜ『陰翳礼賛』を書いたか－他作品から読み解く経緯」
ストラスブール大発表：「『無味礼賛』と『陰翳礼賛』／「『陰翳礼賛』-外国人に残した印象と普遍性」／
「谷崎と九鬼とフランス人の美的概念の比較研究」／「『陰翳礼賛』と「めぐり逢う朝」」／
（15：30 在ストラスブール総領事赤松武氏からのご挨拶）
17:00 ゼミ終了 大学宮殿見学、
18:00 CEEJA に向けチャーターバスにて出発（ストラスブール大学生および教員同行）
19:30 CEEJA 着、ディナーパックの日本食で夕食
夜ストラスブール大学学生と懇親会（オリガス・ホール）
CEEJA 泊（ストラスブール大学生宿泊）

■5 日目

2月6日(木)

7:00 CEEJAにて朝食

8:45 ストラスブールに向け出発

9:30 CEEJA オリガス・ホールにて合同ゼミ：〈谷崎潤一郎『陰翳礼賛』をめぐって〉(第3部)

ストラスブール大生、法大生によるグループ討論、全体討論

11:45 ストラスブールに向け出発、ストラスブールにて合同で自由昼食

14:00 ストラスブール旧市街・ユネスコ世界遺産カテドラル見学(ストラスブール大学有志同道)

17:00 リクヴィル村に向け出発、着後村の見学

19:00 リクヴィル村のレストランにて夕食

21:30 CEEJA 着

CEEJA 泊

■6 日目

2月7日(金)

7:00 CEEJAにて朝食

9:00 CEEJA オリガス・ホールにて若手研究者による国際哲学セミナー：〈言語と社会・言語と哲学〉

ストラスブール大学日本学科講師細川尚子先生発表：

「現代日本における言語とアイデンティティ：国外で日本研究をすることの意義」

法政大学哲学科講師君嶋泰明先生発表：

「日本で西洋哲学を研究することの難しさー日本でハイデッガー哲学を研究してきた経験から」

法政大学哲学科4年生石塚奎吾君発表：

「私のカールスルーエ大学での留学生活」

12:00 コルマルへ向け出発

12:30 コルマル旧市街にて昼食

15:00 ウンターリンデン美術館見学、その後市内自由見学

17:50 CEEJAに向け出発

18:20 CEEJA 帰着

18:45 CEEJAにてディナーパックの夕食

CEEJA 泊

■7 日目

2月8日(土)

8:00 CEEJAにて朝食

9:30 キーンツハイム村見学

11:00 CEEJA 図書館パウエル・コレクション見学

13:00 バーゼル空港に向け出発

16:50 バーゼル空港発、ミュンヘン経由、羽田空港着で帰国(翌日)

全移動手段チャーターバス

機内泊

§3 参加学生の言葉から

①学生Aさん

「国際哲学特講 帰国レポート」

<感想と考察>

今回、国際哲学特講に参加した目的として、海外へ実際に足を運び、現地の人との交流を通して、日本について考えるということがあった。その目標に向け、まず半年ほどかけてプレゼンテーションの準備をし、当日を迎えたが、本当に大変だったが、1週間を無事に終え、帰国してから振り返ってみるととても学びの多いものとなった。まず、率直な感想としては、あらゆる経験が新鮮でとても楽しかった。アルザスという街が日本との関係が深く、CEEJA の施設で日本について学んでいる方々に出会い、今まで日本にいただけでは感じたことのなかった、外から見た日本の魅力があるということに気づいた。また、観光で訪れた城や教会は、日本では決して見ることでできない芸術に触れることができ、言葉にできない感動を覚えた。クレマー先生は「国民性の違い」という単純な考え方が好きではないとおっしゃっており、あらゆる物事をその違いとして片づけてしまいたくはないが、やはり純粋に国民性の違いというものを感じる場面があった。例えば、街中やレストランで気軽に話しかけてくれる人や、言葉を大切にする文化に触れ、日本の他人への無関心を改めて感じ、少し悲しさも感じると同時に、海外へ住む憧れを感じた。

また、この研修を通して強く感じたことは、「言語化することの難しさ」である。プレゼンテーションの準備においても、現地の学生とディスカッション形式での交流においても、私自身の言おうとしていることがうまく伝わらなかった際、うまい言葉が見当たらずどのように言い換えられれば良いのか考えさせられることが何度もあった。また、同様に、他者の言おうとしていることを理解することの難しさをとて感じた。こうした半年近くの経験で考えたことは、自己と他者との間で考えを共有させるために用いる「言語」を自分自身ですらもうまく使いこなせていないという困難である。黒田先生や細川さんの講演でも言語についてのお話があったが、個人と個人の間である一つの単語を共通のものとして認識しているようで、個人間にある認識の差異から齟齬が生まれてしまうのだと思った。だが同時に、その面白みを感じた。パスカルの「幾何学の精神」「繊細の精神」という言葉に置き換えるならば、他者と話をする際に、「幾何学の精神」では表面上会話が成立しているように見えても、「繊細の精神」で見たときに、その表面上言葉で伝わっていない個人の考えの差異に直面し、困難を感じると同時に、自己の考えを改めて「繊細の精神」によって考え直すという経験をした。大学に入学してから2年間、講義形式で一方的に先生の話を受動的に聞くばかりで、意見を交換しながら、自分たちの発表の方向性を決めていくということは初めてであったためとても良い経験になった。この言語に対する興味を来年以降のゼミや、日本語—ドイツ語間での勉強に生かし、さらに深い学びをしていきたいと思う。

②学生 B さん

「国際哲学特講レポート」

<感想と考察>

国際哲学特講を通して、「ものの見方が変わるとはこういうことなのだ」と実感することができた。国際哲学特講の授業を取り、ドイツとフランスへ行くことができたのは私にとって本当に貴重な経験となった。このレポートでは、私の感じたことや考えたことを、「ドイツでの発表」「フランスでの交流」「ドイツとフランスの文化」の三点に分けて書いていきたいと考える。

まず、「ドイツでの発表」は私にとって本当に有意義なものとなった。ドイツの学生の日本語力は驚くべきもので、わたしもせっかくドイツ語を勉強しているのだから卒業までには話せるようになりたいと思った。また、ドイツでの発表は事前準備が特に大変で、班のメンバーと意見が衝突したり、休日にわざわざ学校に行って何時間も話し合いをしたり、出来たレジュメをさらに英語に直したりと、他のどの授業よりも勉強時間のかかるハードな授業だった。しかし大変だった分、その発表を褒められると嬉しくてたまらなかった。発表の後、ハイデルベルク大学の学生とランチをしているときに「あなたの英語は文章も発音も完璧だった。」と言われ、お世辞ではあるだろうが自信が持つことができた。また、学生の中にトランスジェンダーだと思われる人がいたのだが、その人が「LGBTQ+を区別せず、全てSOGIの観点から人々を捉えて皆を当事者にするというあなたたちの考え方、私とても好き。」と言ってきて、内容がきちんと伝わった喜びと、当事者の人にも考えが受け入れられた嬉しさと少し泣きそ

うになった。

次に「フランスでの交流」について書いていく。フランスの学生もまた日本語が上手で、驚かされると同時にドイツ語が話せない自分を不甲斐なく思った。そのことについて徳江さんに相談すると、「勉強はいつでもどこでもできますし、生涯積み重ねていくものですから、今からそしてこれから頑張ればいいんですよ。」と仰ってくれた。誰もが一度は耳にしたことのある言葉だとは思いますが、実際に勉強を積み重ね、何か国語も話せて、歴史や宗教など何でも知っている人が言うと言説力が違い、心打たれた。徳江さんもそうだが、総領事の赤松さん、黒田先生、細川さん、CEEGAの副所長ご夫妻など普通なら絶対に会えないような立派な大人に沢山会えたことは貴重な経験であった。現状に満足せず、自分に負荷をかけ続け、語学やその他学問の勉強に努めたいと思う。

最後は「ドイツとフランスの文化」であるが、文化面では驚くことが本当にたくさんあったので、特に三つを挙げたいと思う。一つ目は挨拶の文化である。お店やバスなどで何度も挨拶やお礼をすることの大切さを学んだ。徳江さんが「お店の人に挨拶やお礼をしないと本当に失礼ですし、人間として扱われませんよ。」と言っていたのには背筋が凍った。二つ目は、フランスのカップルは常に男性からのアプローチで始まるということである。100%そうではないだろうし、人にもよると思うが、フランスの男性は大変だなあと思った。しかしそれと共に、フェミニズムの観点から考えると、常に男性からのアプローチを待つというのは、男女平等ではない気がする。三つ目はトイレである。ドイツやフランスのトイレはほとんどが汚かったり、使い勝手が悪かったり、街中でも数が少なく見つけられなかったりと困ることが多かった。今までは当たり前だと思っていた日本のトイレが、利用のしやすさや清潔さにおいて世界最高水準なのだと知って驚いた。当たり前のものを疑い、その文化をただ単に「分かる」のではなく「理解」することが大切なのだという黒田先生のお話を思い出した。

以上のように、ドイツとフランスで過ごした日々には驚きや学びが沢山あった。今回の旅を通して、一番の収穫は「卒業までに英語とドイツ語をきちんと話せるようになる」という目標を得られたことである。石塚さんの話を聞いて、留学のハードルがグッと下がったので、独検2級を取り、100万円の奨学制度を使ってドイツに行けるよう、春休みは精一杯勉強しようと思う。

③学生Cさん

「国際哲学特講レポート」

<感想と考察>

この哲学特講を経験して、短い期間ではあったけれど、自分の視野が広がったことはもちろん、より本質的な部分で自分の軸の幅が広がる可能性を感じた。

まず、この哲学特講のメインである発表面では、日本、フランス、ドイツ、それぞれ個性があって想像以上にしっかりとした発表を聞くことができたととても感動した。

ドイツでのジェンダーについての発表では自分たちの知識の足りなさや日本人の関心の薄さを感じてもどかしく思った。この問題については私の中で、できれば周りも巻き込んで考えていきたい。フランスでの陰翳礼讃についての発表では、Dグループの発表を膨らませた黒田先生の答えからフランス、日本のグループそれぞれの主張が終わりまで綺麗に繋がっているようで興味深い流れになっていた。「含蓄」「願望、幻想」「不完全」といったキーワードをすべて陰翳が内包していて、谷崎が意図した以上のものを陰翳礼讃という本に見出すことができ、本を正確に読むことは大事だけれど、違った視点を持つことの面白さを感じた。最後に議論した陰翳、特に何か欠けているものに魅力を感じるのは日本に固有なものなのか、普遍的なものなのかという問いには今後答えを見つけていきたい。

また、私は発表や議論をする前、それぞれの主張は大体は日本人、フランス人、ドイツ人の国民性に基づいたはっきりと区別できるものになるだろうと思っていた。しかし、発表や議論を進めるうちに、意外とその区別ははっきりしておらず、主張は本当に人それぞれであり、何らかの枠に収まるものではないと気づいた。このことから、最初から偏見を持たないのが理想だけれど、何か偏った見方をしたとしてもそれを修正できる機会を持つことのほうが大切だと考えた。これは「わかる」から「理解する」

に変えることにも繋がる。

そして、全体を通した課題として、私も含めた日本人の愛国心のなさを考えた。愛国心は一步間違えれば危険なものになる可能性もあるが、少しも愛国心がないことは国自体が変わるのを遅らせてしまうのではないかと思った。つまり、愛国心のなさが無関心につながるということである。多様性があるのは大前提として、飽和状態にならないために、自文化理解を通して少しの愛国心を芽生えさせる必要を感じた。

国際哲学特講を終えて、自分の視野がより広がったことは確かだけれど、何か明確な答えを得ることができたわけではなく、さらに考えてみたい事柄が浮かび上がってきたことが今回の収穫だった。しかし他国の文化に触れたことで、歴史や宗教など知らないことはまだたくさんあり、本質を知るには周辺から固めなくてはいけないことも改めて感じた。

これからも、この経験を活かしつつ、物事をあらゆる角度から見ることを心がけていきたい。

④学生 D さん

「まとめのレポート―アルザス研修に参加して」

<感想>

ドイツとフランスには、昔ながらの街並みや風習がそのまま残っていることが、とても印象深かったです。町並みについて、道路がアスファルトではなく、石畳のでこぼこした部分が多いことや、車があちこちに縦列駐車されていることが印象的でした。また、教会やお城なども、ほとんど昔の状態から手を加えられていないことが印象的でした。日本では、道路は整備され、車は駐車場に停められ、世界遺産であっても、例えばお城にもエレベーターがあったり、解説パネルが設置されていたりと、昔ながらの街並みには手が加えられています。確かに、日本は整備されているおかげで便利ですが、風情や美しさというものは、ヨーロッパの街並みにはかないません。風習について、日曜日は休むお店が多いことや、食事を取るのに時間をかけることや、挨拶を大事にすることが印象的でした。日本では、稼ぎ時の日曜日にお店を休むことはまずありませんし、食事は品数が少なく、早めに済ませがちですし、挨拶は、親しい人や同僚などにしかしない人が多いのではないのでしょうか。

研修中に聞いた、石塚さんや黒田先生の話はとても印象的でした。石塚さんは、様々な人生経験をされているので、話がとても面白かったです。恋愛の話や、学業の話は、一般的な価値観やモラル的に良くない側面もありましたが、私は自由奔放に、自分がしたいことを貫く石塚さんの生き方に、とても惹かれました。留学はだいたい1年間で生活費と学費など諸々込みで120～130万円程かかるけれど、100万円は奨学金が出るという話や、授業は週数回で、あとはやりたいことをしているという話、強制的に日本語以外の言語を話す環境に身を置くことで、それらの言語が身につくという話を聞いて、留学してみたい気持ちが増えました。黒田先生は、「わかる」と「理解する」の違いの話や、「あたりまえ」を考えることの難しさの話をしてくださったことが、とても勉強になりました。また、私たちの発表を、とても褒めてくださったので、嬉しかったです。数ヶ月間の努力が報われた気がして、真剣に谷崎潤一郎と向き合った甲斐がありました。真剣に何かを研究し、学ぶことの楽しさと達成感を知ることができたので、これから始まるゼミや、卒業論文の作成にしっかりと向き合って、いい成果を出せるような気がします。

<考察>

私がこの研修で最も学んだことは、「わかる」と「理解する」の違いではないのでしょうか。また、それにより、「繊細の精神」への理解も深まったような気がします。黒田先生は、「わかる」ことを規則に従って行動できることであり、「理解する」ことを規則の理由を説明できることだとおっしゃっていました。例えば、日本人は日本語を何不自由なく使っていますが、その細かな規則を説明する事ができる人はほとんどいません。一方、外国人の日本語学習者は、日本語がそれほど上手に使えなくても、細かな規則を知っている事があります。この場合、日本人は日本語を「わかる」状態で、外国人は日本語を「理解する」立場であると黒田先生は指摘していました。私は、この区別をパスカルにあてはめると、「わか

る」のが「繊細の精神」で、「理解する」のが「幾何学の精神」になるのではないかと思います。また、谷崎潤一郎の日本、西洋、東洋の見方は、この二つの点から、初期の『刺青』から『陰翳礼讃』にかけて変化しているのではないのでしょうか。詳しく説明すると長くなってしまうので、簡潔にいうと、日本については、「わかる」だけの状態から「理解する」立場が加わったのではないのでしょうか。谷崎には、関東大震災後の関西への移住を機に、日本について、異国を見るような目で見るようになったというエピソードがあります。これはすなわち、日本を「理解する」ように努めたという事でしょう。谷崎が、もし、日本を「わかる」だけの立場であつたなら、「あたりまえ」な日本人のくすんだ肌色や、家屋の陰影、不潔さや不便さに、風流さや美を見出したのでしょうか。私はとてもそうとは思えません。私は何かを、「あたりまえ」と思っている状態は、とても偏見に満ちた状態ではないかと考えています。その状態では、「あたりまえ」のものの価値や良さに気づいていない事が多いと思います。そんな状態では、「あたりまえ」なものとの他のものを比較する際、平等な基準で正しく優劣をつけることなどできないのではないのでしょうか。その証拠に、関東大震災以前、谷崎は西洋や東洋を賛美し、日本を蔑むような小説を数多く残しています。関東大震災以降、日本を「理解する」ように努めてからは、偏見が薄れ、「あたりまえ」だと思って見過ごしてきた日本の良さに気づいたのか、日本を肯定的に捉え、『陰翳礼讃』においては、日本を賛美しているところもあります。ここで、闇雲に日本を褒めて西洋を卑下することがないのは、偏見が薄れたために、両者を平等に見る事ができたからではないのでしょうか。また、私は「わかる」というのは、ある人がそのコミュニティに属する照明ではないかと考えます。そのため、谷崎が東洋を「われわれ東洋人」というように、日本と同一視している節があるのは、彼が東洋に留学した経験があり、少しその文化を「わかる」状態であるからかもしれません。

黒田先生がおっしゃっていたように、この、「わかる」と「理解する」の二つは異文化を理解するために重要だと思います。また、A班の発表のように、SOGIが受け入れられるため、そして、それに限定されず、自分とは違うあらゆる他人を理解して、受け入れるためにも重要ではないのでしょうか。私は、「わかる」が欠けると本当の理解には至らないため、「理解する」が欠けると偏見に陥ってしまうため、両者を同時に持つ事が必要だと考えています。そのために、例えば外国の文化を受け入れるためには、言語や歴史を学ぶだけでなく、実際に外国に足を踏み入れて、文化を体験することが重要であり、他人を受け入れ、親しくなるためには、他人のことを調べたり聞いたりして自分の頭の中で相手のイメージを構築していくのではなく、実際に対話し、行動を共にしていく事が重要なのだと考えられます。

私はこれからの人生において、「わかる」と「理解する」の両方を大事にして、生きていきたいと思います。そして、様々な文化や人を受け入れられ、黒田先生や徳江さん、安孫子先生のように、少しでも、世界が争いのない、良い方向に向かうように貢献できる大人になりたいです。

⑤学生 E 君

「まとめのレポート アルザス研修に参加して」

<感想>

私が印象に残ったことは主に2つです。それは自分の見たことの無い風景や建物を肌で感じたことと、様々な人に出会い様々なことを話し考えたことです。

1 つめの風景や建物には、本当に言葉を用いるのが困難な程に、自分に強い印象をもたらしました。街並み、ブドウ畑、道路、教会、美術館など、触れるもの全てが新鮮でした。特に、教会に関してはとても興味深く感じました。自分は教会や宗教に詳しいわけではなく、むしろ客観的に建物として見ることにしか出来ませんでした。が、そんな自分にも教会は他の建物とは異なる強烈な印象を与えました。ステンドグラスやパイプオルガン、柱、像、様々なものを構成する石など全て自分を退屈させませんでした。それはまさに脳で考えて分かる事ではなく、心で理解するものなのかもしれないと思いました。美術館の絵画なども同じで、何を描いているか分からないものも自分にとってはたくさんありました。が、それを「なんだこれ、変なの」とは、一蹴できませんでした。とにかく、様々なものが目に止まる、目が忙しかった、そんな印象でした。

もう1つ、様々な人に出会ったことです。これはもちろん現地の人もですが、同じ哲学科生の人や先生も含まれます。授業の話も関係のない他愛もない話も、店員さんとの会話ですら楽しく感じられました。好き嫌いの話、自分がどう考えるか、相手はどう考えるか、それは何故か、それにはほとんど言葉が使われていることに気づきました。普段よりも言葉を注意深く、正確に相手に伝わるように気をつけ、逆に日本では普段たくさんの誤解を招いているのかもしれないと感じられました。フランスの学生たちとはもちろん、日本の学生とも自分を理解してもらうために試行錯誤をしました。それがなぜだか楽しく、嬉しく感じました。

また、とても個人的な感想として旅先では食事の時間が日本に比べ長く、ゆっくり美味しく食事を楽しめたため、その点でも大満足でした。

<考察>

考察としても主に2点述べたいと思います。

1 つめはやはり、考えるだけでは分からないこともあるということです。自分は今まで論理主義というか主知主義というか、根拠をハッキリさせてから事象に対して納得する性分でした。しかし、ヨーロッパでの出来事は根拠なしに自分に納得を思わせました。もちろん、しっかり調べたりすれば建物の装飾や街のつくりにも根拠はあるのですが、それとは関係なしに自分は感動しました。根拠はなくとも確かに心が動きました。その自分にも驚きましたし、それを普段感じられるようにいたいと思いました。これは考え方の変化ですが、物事から学んだり吸収したりする時、それを受ける側の重要性を強く感じるようになりました。良くも悪くも、伝わり方は受け取る側に委ねられることを知り、そこに自分は自由を感じました。ヨーロッパでこそ普段見ないものからの影響は大きかったですが、日本にだって自分が気づかないだけで、興味深く感動するものがあるのかもしれないと思ったのです。だからといってしまっただけですが、留学を積極的にしたいとは思いませんでした。日本をもっと見てみたいと感じたからです。まだまだ楽しい事があるとそう思います。

2 つめは逆に人と会話する時にもっと丁寧に言葉を使うということです。言語の異なる人同士ではやはり、意思が伝わりづらくそのせいもあって伝わったかどうかの確認も難しいです。しかし、その場合は「本当に伝わったかな？」という疑念があります。日本人同士での会話をする時その疑念はありません。伝わったと確信します。その危うさに築けたと思います。全てが正しく伝わらなければならないとは思いませんが、もっと丁寧に言葉を使うべきということ、100%意見が伝わったと思うべきではないこと、を感じました。その反面、言語の壁はその点を注意すればそこまで厚くないとも感じました。言語がわからなくて全く伝わらない、なんてことはないのではないかと思います。

⑥学生 F さん

「国際哲学特講 感想と考察」

<感想と考察>

今回の研修では、普段出来ないような体験が沢山できてとても印象深いです。私は、ヨーロッパへ行くのが今回初めてだったので、空港に着いた時から言葉も分からず、戸惑うことがたくさんありました。ただ、ドイツの学生もフランスの学生もとても優しく接して下さり、不安を払拭することができました。実は、ヨーロッパに来る前までは、悪いイメージの方が先行していたので、今回でそのイメージを払拭できてよかったです。

フランスで過ごす時間が長かったですが、徳江さんや、ノアくんアニャさんをはじめとする、ストラスブール大学の学生さん達には本当にお世話になったと思います。フランスのことわざだったり、飲み席で使う言葉だったり、普通に日本で勉強しているだけでは触れられないようなことを教えてもらいました。私は、フランス語選択ではありませんが、とても勉強になりました。フランスでは、過ごした時間が長かった分、離れる時は自分の家を離れるくらい悲しかったです。

また、徳江さんの人柄にとっても感動させられました。私は、今まで海外に出て働く女性と関わったことがありませんでした。徳江さんの話を少し聞きましたが、とても積極的で、私も徳江さんのように行

動力のある女性になりたいと思いました。これは、細川先生に対しても言えることだと思います。哲学科の教授は男性陣ばかりで、女性の先生と深く話をする機会に恵まれなかったのが、今回は得るものが大きかったように感じます。(哲学科の先生方に不満を抱いているわけではないので誤解しないでくださいね!)

この研修で1番大きく感じたことは言語の凄さでした。日本では、小中高で英語の教育をするのが一般的ですが、それをものにしている人は少ないと思います。実際に私も英語が本当に苦手で今まで沢山苦勞してきました。しかし、言葉が通じることによって多くのことを得られるのではないかと感じます。今回の研修は私たちの日本語にドイツ、フランスの学生さんたちが合わせてくれましたが、そのお陰で深い部分まで関わることができました。言葉が通じれば、わかる事が多いし、人対人として仲良くなれると思います。私の第二外国語は、韓国語なので今回は韓国語をつかってチャレンジしてみることは出来ませんでした。が、実際韓国旅行に行く時に習ったことを使って話しかけてみると会話の回数が増えることが多々あります。私自身も自分の言葉に合わせてもらおうと嬉しかったので、言語の重要性を痛感しました。言葉が通じれば、相手もそれに応えようとしてくれるので良いコミュニケーションが産まれるのではないかと思います。

私は韓国アイドルやドラマが好きで、よく韓国に行くし、アイドル達が言っていることを理解したい、という思いがあるので、韓国語の勉強に対するモチベーションを保ってきました。韓国語に対してはモチベーションがあったので、学習のスピードも早く上達具合も英語より全然早かったです。今までは韓国語以外に魅力を感じてなかったし、他の国に行きたいともあまり思いませんでした。しかし、今回今まで関わらなかったような人達と触れ合って、その考え方が変わりました。もっと沢山の人と関わりたいし、もっと広い世界を見てみたい、と思うようになりました。そのために、沢山の言語を学んでみたいです。その国のあいさつ、簡単な言葉を言えるだけでも全然違うと思います。日本に帰ってから暇だな、と思っていましたが、学んでみたいことが沢山増えて、春休み中にチャレンジしてみようと思います。そしてその成果を試したり、別の視野を見つけたりする為にもっと海外に出てみたいと思います。

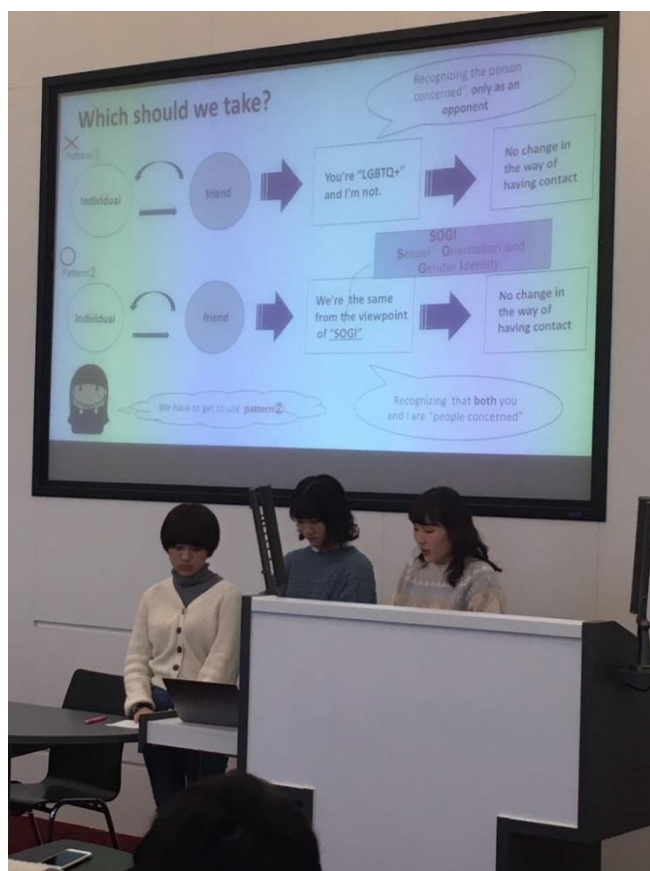
今回、このような気持ちにさせてくれた現地の皆さんにはほんとうに感謝していますし、国際哲学特講の道を切り開いて下さった安孫子先生には感謝しています。ありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いします。

[※以上は帰路、あるいは帰国直後に執筆された、研修に参加した学生たちの感想レポートから、短めのもの6本を選び、筆者の了承の上で、転載したものです。]

§ 4 写真でたどるアルザス研修

[※以下の写真は大部分、研修に参加した学生が撮影したのですが、一部は在ストラスブール日本国総領事館からご提供いただいたものを使わせていただいています]。

■ハイデルベルグ大学—合同ゼミでの発表の様子



■ハイデルベルク大学—合同ゼミでのグループ討論の様子（1）



■ハイデルベルク大学—合同ゼミでのグループ討論の様子（2）



■ハイデルベルク大学—合同ゼミを終えて、教室の外で



■ハイデルベルク大学—学食（Menza）の前で、昼食を終えて



■ハイデルベルク大学—大学自治の象徴である学生牢の中で



■ハイデルベルグ—‘哲学者の道’から望むネッカー川とハイデルベルグ旧市街



■ハイデルベルグーハイデルベルグ城内



■ハイデルベルグーネッカー川上の古橋からハイデルベルク城を望む



■アルザスーセレスター市、人文主義者レナニュースゆかりの人文主義図書館前



■アルザスーセレスター市、サン・ジョルジュ教会の15世紀のステンドグラス



■アルザスーオーケニスブル城



■アルザスー不思議なエギスハイム村



■ ストラスブール大学—赤松武総領事のご挨拶



■ストラスブール大学—赤松武総領事を囲んで



■ストラスブール大学—合同ゼミでの発表の様子（1）



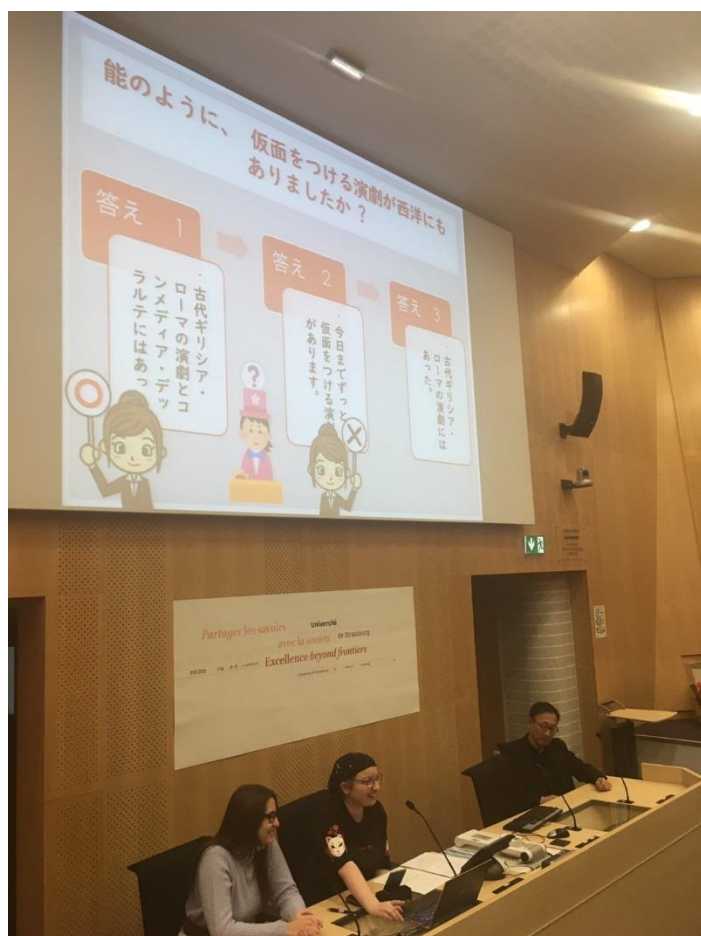
■ ストラスブール大学—合同ゼミでの発表の様子（2）



■ ストラスブール大学—合同ゼミでの発表の様子（3）



■ ストラスブール大学—合同ゼミでの発表の様子（４）



■ストラスブール大学—大学宮殿で、合同ゼミを終えて



■ストラスブール—大聖堂の前



■CEEJA—合同ゼミ（オリガス・ホール）でのグループ討論の様子（1）



■CEEJA—合同ゼミ（オリガス・ホール）でのグループ討論の様子（2）



■CEEJA—合同ゼミ（オリガス・ホール）を終えて



■CEEJAーオリガス・ホールでのストラスブール大学細川先生（社会言語学）の講演の様子



■ コルマールー小ベニス地区の運河にかかる橋の上で



■ コルマールーレストランでのタルトフランベの昼食（1）



■ コルマール—レストランでのタルトフランベの昼食（2）



■CEEJA―近くのキーンツハイム村への散策、戦争の記憶



■CEEJA―帰国の途へ、CEEJA 副所長パウエル先生と奥様のマチアス先生とともに



§5 地元マスメディアでの扱い

■ 在ストラスブール日本総領事館 HP から Facebook と Twitter の記事

<https://www.facebook.com/JaponStrasbourg/posts/611031246128391>

<https://twitter.com/JaponStrasbourg/status/1225455055312183296?s=20>

※ストラスブール大学の合同ゼミ会場に赤松武総領事が来られ挨拶された際の様子を紹介します

■ 「アルザス新報」(Dernieres Nouvelles d'Alsace) の 2 月 8 日と 2 月 15 日の記事

※研修全体の内容や流れの紹介が好意的に行われています。

KIENTZHEIM

Des étudiants japonais en visite

Une vingtaine d'étudiants japonais de l'université Hôsei (Tôkyô) visitent cette semaine l'Alsace pour un complément de formation. Accueillis au CEEJA (Centre européen d'études japonaises d'Alsace), ils ont suivi des conférences données notamment par les enseignants du département d'études japonaises de l'Université de Strasbourg. Des ateliers de jeunes chercheurs en philosophie ont été organisés avec les enseignants autour de la thématique suivante : « Le langage à travers la société et la philosophie ». Des visites de monuments ont complété ce programme, au château du Haut-Koenigsbourg, à la cathédrale de Strasbourg, à la Bibliothèque humaniste de Sélestat et au musée Unterlinden à Colmar. L'université Hôsei est membre du Club académique Europe-Japon du CEEJA.

[2020 年 2 月 8 日付]

Des étudiants japonais en séminaire



Les étudiants de l'Université Hôsei en séminaire au Ceeja. DR

Les étudiants de l'Université Hôsei participent à un séminaire de Master en Alsace, au Ceeja et à l'Université de Strasbourg.

Tout au long de l'année dans le cadre de son volet formation, le Centre Européen d'Études Japonaises d'Alsace accueille de nombreux étudiants japonais.

Chaque année des étudiants en philosophie de l'Université Hôsei sont accueillis au mois de février.

Du 2 au 8 février, une vingtaine d'étudiants japonais de l'Université Hôsei de Tōkyō visitent l'Alsace et le Ceeja. Ce séjour comporte un séminaire officiel de Master, intégré à leur cursus japonais, réparti sur l'Allemagne avec l'Université de Heidelberg (une journée) puis l'Alsace (une semaine) avec des conférences en langue japonaise données notamment par les enseignants du Département d'études japonaises de l'Université de Strasbourg, auxquelles participent

les étudiants de ces universités partenaires sur les thèmes « LGBTQs au Japon » et « L'essai de Tanizaki Junichirō L'éloge de l'ombre ».

Ce séjour est aussi l'occasion pour les étudiants de se rendre dans plusieurs villes et villages d'Alsace, ainsi que dans certains hauts-lieux de la culture locale, parmi lesquels le château du Haut-Koenigsbourg la Cathédrale de Strasbourg, la Bibliothèque humaniste de Sélestat et le Musée d'Unterlinden à Colmar.

Pendant toute la durée de leur séjour, ces étudiants sont accueillis au Ceeja.

Après les visites sur le terrain, des ateliers de jeunes chercheurs en philosophie sont organisés sur place avec les enseignants autour de la thématique « Le langage considéré à travers la société et la philosophie ».

L'Université Hôsei de Tōkyō est membre du Club Académique Europe-Japon du Ceeja.

Renseignements au 03 89 23 16 53. www.ceeja-japon.com

[2020 年 2 月 18 日付]